

F8-01

いじめや不登校を未然に防ぐための校種間連携の在り方 —ピアサポートの手法を生かしたブックレットの作成を通して—

研究の概要

いじめや不登校が増加する原因の一つとして、校種間の円滑な「接続」が十分にできていないことが挙げられる。そこで本研究では、ピアサポートの手法を生かし、校種間における行動連携をより促進するための活動とその方法を具体的に分かりやすく示したブックレットを作成した。また、「保幼小中連携」に関するアンケートを実施した分析結果や、作成したブックレットを小・中学校で活用した実践報告を基に、いじめや不登校を未然に防ぐための効果的な校種間連携の在り方を探った。

キーワード

校種間連携, ピアサポート, いじめ, 不登校, ブックレット

目 次

I はじめに	1	(1) 実態と目的	7
II 研究の目的	1	(2) ブックレット活用と教師の連携	7
III 研究の内容	1	(3) 成果と課題	8
1 「保幼小中連携」に関するアンケート結果の分析	1	2 小中連携の実践 (B中学校第3学年)	8
(1) 情報連携に関する内容のまとめ	1	(1) 実態と目的	8
(2) 交流活動又は合同活動に関する内容のまとめ	2	(2) ブックレット活用と教師の連携	8
2 ブックレット作成における工夫	3	(3) 成果と課題	9
IV ブックレットを活用して、校種間連携を図った実践	7	V 校種間連携の在り方に関するまとめ	9
1 幼小連携の実践 (A小学校第5学年)	7	1 成果	9
.....	7	2 課題	9
		VI おわりに	10

岡山県総合教育センター

生徒指導部長 常本 直史
指導主事 竹内 悦子
指導主事 山崎 克磨
指導主事 橋本 淑子

いじめや不登校を未然に防ぐための校種間連携の在り方 —ピアサポートの手法を生かした ブックレットの作成を通して—

課題:いじめ・不登校

課題克服の視点:校種間の「接続」の問題に着目

目的:いじめや不登校を未然に防ぐことに効果のあるピアサポートの手法を生かし、行動連携を具体的に促進するための内容とその方法を分かりやすく示したブックレットを作成し、効果的な校種間連携の在り方を探る。

行動連携

連携支援シート等の情報連携

教師による出前授業

合同活動

交流活動

促進

ここに
着目



研究の手順

中学校区へのピアサポートの導入
岡山県総合教育センター研究紀要第1号
(2008)

2008年の実践を基に校種間
連携を促進するためのブック
レットの原案作成

研究協力委員に
よるブックレットを
活用しての実践

連携の実態
把握のアン
ケート調査

連携の課題を明らかにし、課題克
服のための方法を探る

成果をブックレットにまとめる

- ピアサポート・プログラム導入の教育的意義
- 導入のためのコアチーム編成
- 「培いたい能力の選定」「評価の観点の作成」
「ピアサポート・プログラムの作成」
- 導入のための教員研修プログラム作成

- 校種間の連携, 中1ギャップにおける先行研究の調査
- 研究協力校による小・中学校間の交流実践を基にした原案の作成

いじめや不登校を未然に防ぐための 校種間連携の在り方



岡山県総合教育センター

いじめや不登校を未然に防ぐための校種間連携の在り方

—ピアサポートの手法を生かしたブックレットの作成を通して—

I はじめに

いじめや不登校は生徒指導上の大きな課題であり、これまで様々な取り組みがなされてきた。中学校第1学年時は、いじめや不登校が急激に増加する傾向（中1ギャップ）にあり、岡山県においても同様の傾向が見られる。中1ギャップには、中学校第1学年時でいじめや不登校が急増するという現象面のギャップと、中学校に進学した生徒が感じる小・中学校間の学校制度や教職員の指導等のギャップという二つのとらえ方がある。また、小学校第1学年時においては初めての集団生活になじめず授業中に歩き回ったり、私語が絶えず授業が成り立たなかったりする状態が継続的に続くこともあり、大きな課題と言える。このように新しい環境に適応しにくくなっている要因として、新潟県教育委員会が2005年に報告した「中1ギャップ解消調査研究事業報告書」では、それまでの親しい友人、教員等の支えがなくなったり、新しい人間関係がうまくつくれなかったりして、他者とのかかわりの中で、自分の存在価値に自信が持てず、自己有用感が失われていることが指摘されている。そのため、人とかかわる際の社会的スキルの育成を図ることや、校種間の連携が円滑にできるように、学校間の「接続」問題を早急に解決することが求められている。これらの接続ギャップを小さくするためには、上級学校に対する不安感を、期待感や安心感に変える校種を越えた取り組みが必要となる。そのための校種間における連携として、①連携シート等による情報連携、②教師による出前授業、③交流活動、④合同活動等が考えられる。

そこで本研究ではいじめや不登校を未然に防ぐことに効果のあるピアサポートの手法を生かし、校種間における交流活動による行動連携を促進するための活動とその方法を具体的に分かりやすく示したブックレットを作成、配付することにより、校種間の円滑な「接続」を図りたいと考えた。なお、このブックレットは、いじめや不登校を未然に防ぐなどの一次予防として、すべての子どもたちを対象に活用することを目指している。

II 研究の目的

ピアサポートの手法を生かし、校種間における行動連携を促進するための活動とその方法を具体的に分かりやすく示したブックレットを作成する。また、「保幼小中連携」に関するアンケートを実施した分析結果や、作成したブックレットを小・中学校で活用した実践報告を基に、いじめや不登校を未然に防ぐための効果的な校種間連携の在り方を探る。

III 研究の内容

1 「保幼小中連携」に関するアンケート結果の分析

ブックレットを作成するに当たり、岡山県内ではどの程度の校種間連携が行われているのか実態を把握する必要があると考え、岡山市を除く県内全域の小学校及び中学校の生徒指導又は教育相談担当者（小学校255名、中学校115名、計370名）を対象に、各校の実態と担当者の意識についてアンケート調査（表1）を実施した。

(1) 情報連携に関する内容のまとめ

ア 配慮を必要とする児童生徒に関する情報連携の方法

表1 「保幼小中連携」に関するアンケート

- (1) 小・中学校間情報連携に関する内容
 - ア 配慮を必要とする児童生徒に関する情報連携の方法
 - イ 中学校入学時の学級編成の方法
 - ウ 小・中学校合同のケース会議の実施状況
- (2) 保幼小中での交流活動又は合同活動に関する内容
 - ア 交流活動や合同活動の実施状況
 - イ 交流活動や合同活動の活動内容
 - ウ 交流活動や合同活動を実施する際の工夫点
 - エ 交流活動や合同活動による成果や効果
 - オ 交流活動や合同活動の実施の妨げになっている要因

小・中学校の約80%が、小学校第6学年の担任と中学校の教職員が直接会議をして実施していることが分かった。一方、小学校時に特別な配慮をしないまでも、今まで教師や友達からの支援を得ていた児童が中学校入学と同時にそれまでの支えを失い、問題行動が顕在化することがあるため、このような児童の情報も含めた連携が今後更に必要になると考える。

イ 中学校入学時の学級編成の方法

直接小学校第6学年の担任と中学校の教職員とで学級編成作業を実施している学校は41%で半数に満たないことが分かった。その原因として年度末の業務の過密なスケジュールの中で、時間を生み出しにくいことがある。しかし、合同での学級編成作業では、児童の学校での適応や友人関係、いじめの加害や被害の経験等重要な情報交換の場となり、中学校の教職員が児童生徒理解を深めるための情報を得る貴重な機会といえる。特に国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2005）による「中1不登校の未然防止に取り組むために」のデータから、中学校での不登校生徒の約半数が小学校の時に不登校を経験しているか、不登校傾向を示していることが明らかにされていることから、事前に情報を得ておくことは未然防止の観点からも必要である。また、いじめの問題や友達関係のトラブルがある場合、所属する学級を配慮することで、問題行動を未然に防ぐことができる場合も多い。このことから、学級編成時の情報連携は、文書等での伝達だけで終わらせるのではなく、一緒に協議をする中できめ細やかな情報交換をしていくことが大切である。

ウ 小・中学校合同のケース会議の実施状況

小・中学校の合同でのケース会議が行われている学校は30%弱にとどまっている。しかし、限られた時間であっても、適切な支援を継続的に進めて行くために、定期的に小・中学校の教職員が参加し、それぞれの学校段階における児童生徒の発達過程を再確認することや今後の支援の在り方等を協議する場を設定することが必要である。

(2) 交流活動又は合同活動に関する内容のまとめ

ア 交流活動や合同活動の実施状況

小学校のアンケートでは、保幼との交流活動や合同活動は、68%の学校で実施されており、中学校との交流活動実施校（22%）の3倍以上であることが分かった。（図1）中学校のアンケートでも小学校との交流活動は20%の学校で実施され、同様の状況がうかがえた。保幼小における交流活動が多いのは、地理的に小学校と保育園・幼稚園が隣接しているところが多いこともその理由と考えられる。また、保幼中における交流活動や合同活動は11%の学校で実施されていた。

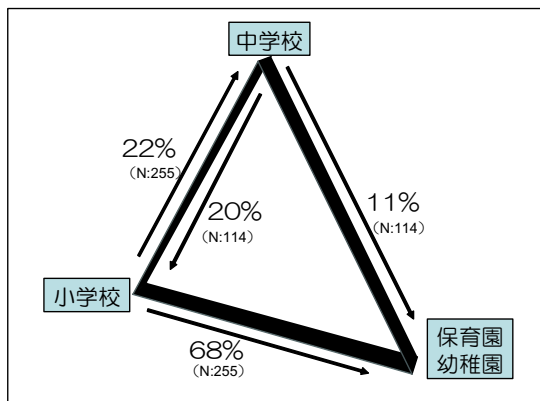


図1 交流活動や合同活動の実施状況

イ 交流活動や合同活動の活動内容（自由記述）

保幼小の交流活動では、新入生体験入学や合同の運動会を実施している学校園が最も多く、学

習発表会、芋掘りなどの野菜の収穫、読み聞かせ、水泳、給食、祭り、遠足等の交流活動が実施されていることが分かった。保幼中との交流活動では、技術・家庭科の保育園訪問（保育活動）が最も多く、続いて運動会や職場体験での交流が多かった。他にも、保育園環境整備、絵本の読み聞かせ、野菜の収穫、合同文化発表会等の交流が実施されている。学校によっては吹奏楽部が園の運動会の行進演奏を行っている学校もあった。また、小中での交流活動では、合同の運動会や学芸会、体験入学、読み聞かせ、給食、遠足、遊び活動等の活動が実施されていることが分かった。これらの活動は全員参加型で小規模校で実施されているものが多く、それ以外の学校では部活動における交流や職場体験活動、及び出前授業等中学生の一部の生徒が参加する形態が多い。

ウ 交流活動や合同活動を実施する際の工夫点（自由記述）

年齢に応じた活動内容の選定、役割分担など事前打ち合わせの充実、上級生のリーダーシップの育成、児童生徒の主体性を引き出すこと等が工夫されていることが分かった。

エ 交流活動や合同活動による成果や効果（自由記述）

「上級学校の様子や雰囲気を感ずることができて、入学への安心感が高まり適応しやすくなる」「上級生の自覚が増し自己存在感が高まる」「校種間の連携の高まり」「児童生徒の肯定感の高まり」等の回答が多かった。実施している学校では校種間の接続における効果を実感しており、これらの意見を広く伝える必要があると考える。

オ 交流活動や合同活動の実施の妨げになっている要因

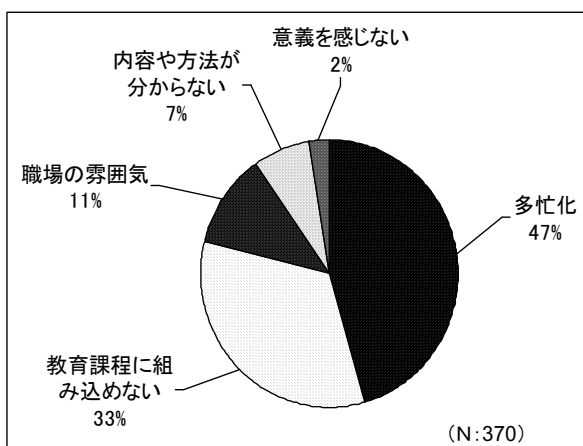


図2 交流活動等の実施の妨げになっている要因

アンケートは「職務の多忙化で時間的余裕がない」「教育課程にうまく組み込むことができない」「職場にその体制や雰囲気がない」「具体的な内容や方法が分からない」「連携の意義を感じない」「その他」の五つの選択肢から回答している（複数回答可）。「その他」の場合は記述の形で記入している。

次にアンケートの結果を図2に示す。「連携の意義を感じない」と答えた担当者は2%で、ほとんどの担当者が連携の意義を感じていることが分かった。交流活動等の実施の妨げになっている要因として一番多かったのが「職務の多忙化で時間的余裕がない」で、47%の担当者が挙げていた。続いて「教育課程にうまく組み込むことができない」を33%の担当者が挙げていた。「その他」の記述から、「校種間の意識のず

れ」「土台となる職員間の交流不足」「リーダーシップの必要性」「有効な活動が見当たらない」といった理由が挙げられている。以上のことから、新たな取り組みを追加することへの抵抗が予想されるため、活動の目的や意義を明確に示す必要がある。そして、実施する教職員が、忙しいと感じながらも児童生徒の自己成長を感じ、活動の成果が実感できることが大切であると考えられる。

2 ブックレット作成における工夫

ブックレット作成においては、アンケート結果から挙がってきている校種間における行動連携の実態と研究協力委員による校種間交流による実践を基に作成した。作成に当たっては、表2に示しているように、四つの課題点に対し、アからコの10項目の工夫点を取り入れることとした。また、校種間での細やかな配慮や工夫点、及び教職員の動きを分かりやすく伝えるために、校種の立場を明確にした案内人（図3）を登場させている。

表2 ブックレット作成における工夫点

校種間連携における課題	工夫		ブックレットの参照ページ
① 職務の多忙化で時間的余裕がない。	ア	授業を展開する際の手引き書として活用できるよう、板書計画や教師の主な発問などを入れる(図4)。	p. 11
	イ	実態把握のためのアンケート結果(データ)を入力するだけで、個人的能力と社会的能力のバランスが一目で分かる集計フォーム(ダウンロード可)を作成する(図5)。	pp. 61-62
② 教育課程にうまく組み込むことができにくい。	ウ	教育課程の中に位置付けることが可能であることを示し(図6)、単元構想の中でも、ピアサポート・プログラムの流れが分かるようにする。	p. 29
	エ	現在行っている活動を洗い出す(図7)。	p. 18
	オ	9年間を見通してピアサポートで培いたい力や評価の観点が、一目で分かるように一覧表に示す。	p. 9
	カ	学習指導案に示している評価の観点が、培いたい力のどこにつながっているのかが分かるように示す。	p. 10
③ 職場にその体制や雰囲気がない。	キ	校種間における連携の意義を明確に示す(図8)。	pp. 2-3, p. 19
	ク	校種間で交流の場を意図的に設けた例を示す。	pp. 24-25
④ 具体的な内容や方法が分からない。	ケ	連携をする際にそれぞれの校種で配慮すべきことや教師の具体的な動きなどについて、分かりやすく示す(図9)。	p. 8
	コ	校種間で連携を図った実践事例や使用したワークシート(図10)、及び資料等を紹介することで、具体的な内容や方法を分かりやすく示す。ワークシートの多くは、Webページにてダウンロードできるようにする。	p. 10 p. 67

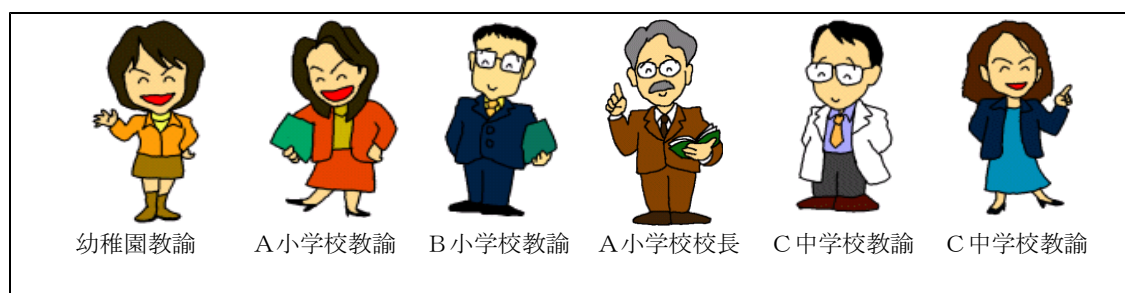


図3 ブックレット活用をする際の案内人



2 9年間を見通したピアサポート・プログラム

●中学生が自信を持てる
部活動で取り組んでいることを、小学校の児童たちに伝えられないかなあ。自分の得意分野なら、自信を持ってアドバイスできるしね。

児童に喜んでもらえたり勝手にされたりすることでより自分自信が持てると思うんだ。

●中学生の自己有用感が高まる
そうよね。このごろの子もたかって、他者から自分がどのようで見られているか自己理解を深めていったりするから、プラスのフィードバックがあると、自分のしていることが誰かの役に立っていると感じられたり、自分は必要とされているって感じられるんじゃないかな。

そういう意を意図的にでも設定してあげたいわね。そのためにも、小学校の先生としっかり話し合う必要があると思うの。

連携のメリットについて話し合おう

●小学生の不安がなくなる
小学校の児童も、中学校への進学が近づくとき、どんな先輩がいるのかな。先輩は優しいかなって不安になるものなんです。

小学校在学中に、中学の先輩と良い関係ができていくと、中1ギャップの解消に、いくらか効果があるんじゃないかな。

●あこがれの先輩のいる中学校へ
例えば秋の陸上練習に、陸上部の生徒がサポートに入ってくれたり、音楽会に向けての練習の時に、吹奏楽部の生徒がアドバイスをしてくれたりすることで、自分もあんなふうになりたいと思う。先輩のあこがれを抱けるんじゃないかな。中学校に入学するの が楽しみになるっていいですね。

●幼児も安心して小学校へ
幼児が小学校に入学する時も同じね。小学校に兄弟姉妹がいる子はまだいいんだけど、兄弟姉妹のいない幼児は小学校に入学することに不安を感じていると思うの。でも、小学校に行ったら知っているお兄ちゃんやお姉ちゃんがいるというのは、安心につながると思うの。小学校に入学しても、なかなか学校になじめず学校不登校を呈する児童もいますもの。

このような話し合いの中から、9年間を見通したプログラムを作成したんです。(p.20参照) これはあくまでもモデルなので、地域や各学校の実態に合わせてプログラムを組んでいくことが大切ではないでしょうか。

地域や各学校の実態に合わせてプログラムを組むといいですね。

図8 連携の意義の明確化

3 実践事例－実践Ⅲ「ようこそ後輩」③紙上相談

指導の流れ ③紙上相談

【生徒会活動の目標】
生徒会活動を通して、望ましい人間関係を形成し集団や社会の一員としてよりよい学校生活づくりに参画し協力して諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度を育てる。

■ 枠組み : 特別活動(生徒会活動) 生徒会役員によるサポート活動
■ サポート活動分類 : 相談活動
■ 必要なトレーニング: ①上手な聞き方 ②問題解決の仕方(相談に乗る)
■ ねらい: 中学校生活に対する小学校第6学年の児童の不安や疑問に答える紙上相談を通して、自己有用感を高める。

動機付け
来年少入学して来る小学校第6学年の人たちが、安心して中学校に来られるよう、先輩としてできることはないだろうか。

トレーニング①(生徒会活動の時間)
「上手な聞き方」p.34参照

トレーニング②(生徒会活動の時間)
「相談に乗る」
・不安や疑問に答える
・小学校の児童に分かりやすく書く

個人プランニング
サポート活動
小学校の児童の中学校生活についての不安や疑問に答えよう。

この時
小学校では

小中教職員の連携
・サポート活動「紙上相談」の流れについて、小中の教職員で話し合っておく。
・中学校の生徒からは、手紙かビデオレターで小学生に呼びかけてもらえるといい。
・中学校の生徒がやる気になるよう、小学校の先生から中学校の生徒に手紙を書いてもらえるかな。
・小中の保護者にもお知らせする。
・中学校に行く準備として、小学校の児童にも中学校の生活について、考えさせる良い機会になりますね。
・小学校の児童に分かりやすい手紙の書き方について小学校の先生から教えてもらえますか。
・小学校の児童には、自分の気持ちを文筆でうまく書けない子もいるので、気持ちをうまく取り替えてあげてほしいな。
・個人プランニングの内容やサポート活動については、事前に小学校に知らせる。
・実施したサポート活動の様子は、小中両校で紹介しよう。

中学校の先生に聞きたいことはないですか。
聞いてみたいことをカードに書いてみよう。
手紙を書いてみよう。
先輩からの手紙を読もう。
お礼の手紙を書こう。

3 実践事例－実践Ⅲ「ようこそ後輩」③紙上相談: トレーニング②

シート1
不安や疑問リストシート
あなたが小学校6年生のころの気持ちを思い出してみよう

不安や疑問だったこと	ドキドキ度	相談したいこと

・ドキドキ度は100点満点として、どれくらい不安だったかを10点きざみで付けて下さい。
・一番相談に乗ってほしい項目に○を付けましょう。

自分が出たことを書くに抵抗のある生徒には、無理をしないでいいよと声かけをします。
相談に乗ってもらう体験を通して相談の大切さや心地よさを感じ取らせて下さいね。
自分がうれしかった返事から、小学生に返事を書く時のポイントを考えさせましょう。

どんな返事がもらえるかドキドキしたけど、みんな親身に答えてくれてうれしかったね。

相談に乗ったり、相談に乗ってもらったりするってなんかいい感じ。小学生からの手紙が楽しみなだね。

相手の気持ちに合わせて、返事を書いてみましょう。

シート2

年 組 名 氏

相談シート

あなたの相談したいこと

1. () よりのあなたの気持ち

2. () よりのあなたの気持ち

3. () よりのあなたの気持ち

4. () よりのあなたの気持ち

返事を書いたら、相談に乗ってうれしかったのはこんなところよ。

相談に乗ってもらったり相談に乗ったりして、お礼の手紙を書きましょう。

図9 校種間での具体的な教師の動き

図10 ワークシート例

IV ブックレットを活用して、校種間連携を図った実践

作成したブックレットを基に県内4か所（倉敷市・総社市・浅口郡・真庭市）において各小・中学校で校種間連携を図った実践を行った。ここでは、幼小連携による実践と小中連携による実践について紹介し、ブックレットを活用した成果と課題について考察する。

1 幼小連携の実践（A小学校第5学年）

(1) 実態と目的

幼稚園は小学校と隣接しており、行動連携を図りやすい環境にある。そこで、ブックレットの実践事例Ⅱ「来年まっているからね」（pp. 27-43）を参考に実践することにした（図11）。第5学年の児童は4月に高学年の仲間入りをしたが、第6学年の児童に支えられることや助けてもらうことが多く、高学年としての自覚がやや弱い。また、自己中心的な行動・言動も見られ、集団の中でリーダー的な児童に任せてしまう傾向にある。幼稚園は、5歳児のみの1年保育である。1年保育では、園内で異年齢のかかわりが十分持てない実態がある。現在通園しているほぼ全幼児が本校へ就学することになる。

このような実態を踏まえ、幼稚園と小学校との交流を計画した。第5学年の児童は総合的な学習の時間の中で「幼稚園との交流」を設定し、教育課程の中に位置付けた。幼稚園では「人間関係」の領域の中で扱った。この交流で期待することは、第5学年の児童では、「高学年としての自覚の高揚」「思いやりや優しい気持ちを持ってかかわる」の2点であり、幼稚園の幼児では、「自分の気持ちに気付いてもらえる喜びを感じる」「小学校入学への期待感や安心感を持つことができる」の2点である。さらにこうした交流を重ねる中で、より一層他者に対する親しみや優しさを感じることができ、来年度の第6学年の児童と第1学年の児童のより良い関係づくりができると考えた。



図11 幼稚園との交流

(2) ブックレット活用と教師の連携

活動に先立って、小学校の教職員と幼稚園の教職員との話し合いの場を設け、ブックレットを基に「保幼小中連携の意義と目的」や「ピアサポート」についての共通理解を図った（pp. 2-5）。幼稚園でも、人との「かかわり」や「つながり」を大切にしていこうという教職員の思いもあったため、今回の交流活動の提案について快く賛同してくれた。また、今後連携を図りながら子どもたちの育ちを見ていこうという思いを共有することができた。以下、大まかな活動の流れとともに教職員間の連携の様子を示す。

まず、交流活動に向けてのテーマや目的について、第5学年の児童と話し合った。その際、ブックレットの「動機付け」（p. 30）の部分が参考になった。児童が小学校に入学した当時の写真や映像を見せることで、入学前の幼児の不安な気持ちを自分のこととして考えさせることができた。また、授業の中で幼稚園の担任に5歳から6歳児の発達の特徴について説明してもらうことで、幼児の立場に立った活動を考えさせることができた。そして、季節ごとの行事等も考慮に入れながら、児童は活動の計画を立てていった。

次に、サポート活動をするために必要な「上手な声のかけ方」や「上手な聴き方」「気持ちを分かって働きかける」等のトレーニングを行った。その際に、ブックレットにある指導の流れや板書計画、及びワークシート等を参考にした（pp. 32-40）。教師の発問も掲載されていたので指導者も安心して取り組むことができた。また、幼児とのかかわりで不安がある児童は、幼稚園の担任にインタビューして、アドバイスをもらうことができたようにした。ここでは、事前に幼稚

園の担任にトレーニングの内容を伝えておき、具体的な場面を想定しながらアドバイスをしてくれるようお願いした。

そして、ブックレットの「ピアサポートで培いたい能力と発達段階に即した評価項目」(pp. 14-17)を基に、この1時間で児童にどんな力を付けさせたらよいのか、そしてそのためにどんな学習展開(交流活動)にしたらよいのかを、小学校の教職員と幼稚園の教職員とで検討した。一緒に検討することで、援助を受ける側の幼児に必要な被援助力についても話し合うことができた。また、交流活動後には、幼稚園から幼児の手紙や絵を届けてもらったり、幼児の保護者や幼稚園の教職員からの感想を聞かせてもらったりした。さらに、小学校では学年便りで保護者に交流活動の様子や、それによって成長した児童の姿を知らせた。幼稚園にも、学年便りを届け掲示してもらおうことで、保護者や地域の方に幼小の連携の様子や意義を理解してもらおう機会となった。

(3) 成果と課題

ブックレットを活用することで、指導の流れがつかみやすく、写真によってイメージが持てたので連携がしやすかった。授業にも他校種の教職員がアドバイザーのような形で参加してくれることで、交流活動に対する児童の関心や意欲を更に高めることにつながった。また、児童は交流活動を重ねるごとに、幼児の気持ちに寄り添って支えることを学び、他者に対する思いやりの心がより育まれた。また、活動後の幼児からの感謝の手紙や幼稚園の教職員からの感謝や励ましの言葉、及び保護者の感想などのフィードバックが、児童の自己有用感をより高めることにつながった。一方、幼児は、励ましてもらえた、認めてもらえたという経験が、「自分の力でもう少しがんばってみよう」という気持ちにつながってきている。課題としては、幼児が自分の力で解決できるようなサポートをしていくことは難しかったという点である。そのためにも、今後幼稚園と連携を取りながら「自分の力でできるように支える」という「サポート」することの意味を今一度再確認をし、今後の学習活動につなげていきたい。

2 小中連携の実践 (B 中学校第3学年)

(1) 実態と目的

本校では、新入生が五つの小学校から入学してくる。実践を行った中学校第3学年の生徒は、小学校の時から不登校や保健室登校の生徒が多数いる。また、特別支援の必要な生徒も複数いる。そこで、第1学年の時から、意図的、計画的に構成的グループ・エンカウンターの手法を取り入れて学級づくりを行ってきた。その効果もあってか、明るく素直な生徒が多く男女を問わず仲が良い。その一方で、精神的に幼いところがあり、他者に依存する傾向もある。



図12 小学校との交流

本校でも、いじめ等の生徒指導上の諸課題がある。

特に、新入生が、中学校になかなかなじみず不適応状態を起こすということが毎年のように生じており、入学時の情報連携だけでは十分ではないということを中学校のみならず各小学校も考えていた。そこで、来年入学してくる新入生が安心して中学校生活をスタートできるようにするとともに、他者とのかわりの中で自分が生かされることを感じとれるよう、いじめや不登校の未然防止という視点で小中の交流活動を実施することにした(図12)。

(2) ブックレット活用と教師の連携

実施に先立って、まずブックレットを基に本校職員に連携の意義や目的、及び交流活動についての共通理解を図った(pp. 2-5)。校内での理解が図れ、交流の内諾がとれた後に、本校の管理職が交流校の管理職に事前に電話で交流活動の趣旨について話をした。その後、小学校の教職員との話し合いの場を設けることができた。そこでも、同じように連携の意義や交流活動のねらい

についてブックレットを基に共通理解を図った (pp. 2-5)。ブックレットの「あるものを生かす」(p. 44) という発想は、教師にとっても生徒にとっても負担が少なく、無理なく活動を進めることができた。次に交流活動であるが、毎年6月に行われるクラス対抗の合唱大会があるので、その合唱大会の取り組みを生かして、小学生に中学校を身近に感じてもらうと考えた。ブックレットの実践事例Ⅲ「ようこそ後輩」(pp. 44-45) を参考にして、総合的な学習の時間の中で合唱の「出前授業」を行うことにした。事前に、生徒にはブックレット (p. 46) を活用し、来年度の新入生が早く学校生活に慣れるために、自分たちに何ができるかを考える時間を設けたり、ブックレット (pp. 30-40) を参考にしながら、かかわる場面を想定し、話し方や聴き方のトレーニングを行ったりした。

(3) 成果と課題

このブックレットを活用することで、校種間における「連携の大切さ」について共通理解できたことは大きな収穫だった。また、いじめや不登校を未然に防ぐための予防的な取り組みとしても評価し合うことができた。交流活動での生徒の振り返りでは、「トレーニングで学んだ話し方や聴き方が実際の交流場面で生かすことができた」「人とかかわる際のコミュニケーションの大切さにあらためて気付いた」等の感想を多く述べていた。そして、交流活動後に届いた小学生からの手紙を読んだり、小・中学校教職員からの感想を聞いたりする中で、より一層生徒の自己有用感が高まったと感じた。「人の役に立った」「自分は必要とされた」という気持ちが強く残ったことは「またやりたい」という次への意欲を生み出し、体育祭などの別の場面でもサポート活動に取り組む動機付けとなった。

校種間連携は、時間の制約が大きいので継続して行うことは難しいが、今ある活動にピアサポートの視点を入れた取り組みなら無理なく実施できることを実感した。本校では中1ギャップを少しでも小さくするために、今後もこうした校種間での連携を大切にしていきたい。

V 校種間連携の在り方に関するまとめ

校種間連携にピアサポートの手法を生かすブックレットを作成し、それを活用して校種間の連携によるピアサポートの実践を行った。その成果と課題についてまとめる。

1 成果

- 連携を進めていく際の目的やねらいについてのずれが生じにくかった。
ブックレットを活用しながら、目指す子どもの姿や指導観を共有できたことで、立ち帰る視点が持て、同じ方向を向いて連携を進めていくことができた。
- それぞれの発達段階におけるかかわり方や、指導法等を学び合うことができた。
幼小中の教職員が連携を図る過程で、幼児児童生徒の発達段階に合わせたかかわり方を互いを知ることができた。また、授業を見合ったり、ゲストティーチャーとして参加したりすることで、教職員同士が指導法を学び合い、互いの授業に生かすことができた。
- 今ある活動にピアサポートの視点を入れて取り組むことで、幼児児童生徒の満足感や役立ち感、他者に対する安心感や信頼感を高めることができた。
社会性や対人関係の育成の場を、今ある活動の中で保障することで、児童生徒の中に既に備わっている援助志向性を引き出すことができた。相手の気持ちに気付いたり、支えたりする姿が見られ、校種を越えての温かい交流が実現した。
- 9年間を見通して、一人一人の育ちを見ていくことの大切さに気付いた。
今までの交流活動は活動そのものが目的でありゴールであることが多かった。何のために活動するのか、その活動を通してどんな力を育てていくのか、その力は次の学年にどうつながっていくのかという視点が持て、改めて9年間を見通した校種間の連携の大切さに気付いた。

2 課題

校種間での連携を図る際に、校内の連携を推進していく担当者や、打ち合わせ等の日程調整を行う担当者を明確にしておくことが課題として挙げられた。また、校種間で互いのことを知っておくことが、その後の連携を順調に進めていく上で大変重要である。そのためにも、ブックレット（p. 24）に紹介されているように、中学校区の研修会や各種部会を活用しながら、教職員同士の仲間づくりが大切であると実感した。

VI おわりに

今回、ピアサポートの手法を生かし、行動連携を具体的に促進するためのブックレットを作成し、効果的な校種間連携の在り方を探ってきた。連携を進めていくためには、それぞれの校種の教職員が、互いの教育を尊重し合い、指導法について理解を深めていこうという謙虚な姿勢を持つことが大切であると実感した。このブックレットを活用することで、改めて「校種を越えて連携することの意義」を考えていただいたら幸いである。

○参考文献

- ・ 新潟県教育委員会（2005）「中1 ギャップ解消調査研究事業報告書」
- ・ 国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2005）「不登校の未然防止に取り組むために」
- ・ 岡山県総合教育センター（2008）「いじめや不登校を未然に防ぐためのピアサポートの導入」研究紀要第1号pp. 71-96
- ・ 高階玲治編集（2009）「幼・小・中・高の連携・一貫教育の展開」教育開発研究所

平成20・21年度岡山県総合教育センター共同研究
「いじめや不登校を未然に防ぐための校種間連携の在り方
ーピアサポートの手法を生かしたブックレットの作成を通してー」
研究協力委員会

指導助言者

小郷 康弘 備前市教育委員会課長代理（平成20年度）

研究協力校

備前市立備前中学校（平成20年度）

備前市立伊部小学校（平成20年度）

研究協力委員

秋山 和規 備前市立備前中学校教諭（平成20年度）

玉谷 一生 備前市立伊部小学校教諭（平成20年度）

浅原 雅恵 倉敷市立第一福田小学校教諭（平成21年度）

竹田 悦子 真庭市立北房中学校教諭（平成21年度）

國金 弘子 総社市立総社西小学校養護教諭（平成21年度）

小野 力矢 里庄町立里庄東小学校教諭（平成21年度）

常本 直史 岡山県総合教育センター生徒指導部長

竹内 悦子 岡山県総合教育センター生徒指導部指導主事

山崎 克磨 岡山県総合教育センター生徒指導部指導主事

橋本 淑子 岡山県総合教育センター生徒指導部指導主事